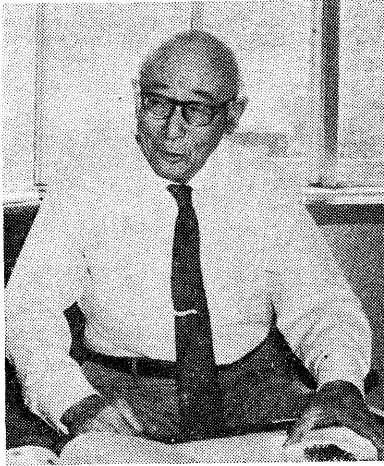


波多野完治



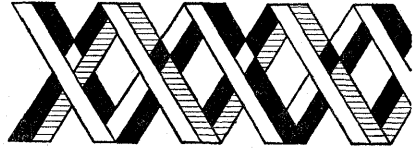
◆問題意識の胎動

本田 今年は、「幼児の教育」誌の八〇巻を記念致しまして、「児童研究と幼児保育」というテーマの特別企画を組みました。児童研究の第一線で長くお仕事を続けの先生方に、インタビュアーをさせて頂いて、色々とお話を伺おうということです。よろしく、お願い申し上げます。

ところで、今日、私は、ここに、懐しい本を持って参りました。これは、先生が昭和六年にお出しになった「児童心理学」、これは「児童心理と児童文学」昭和二五年のです。そして、これは、大変貴重なお本で、昭和一六年の「児童文化論」です。先生が、日本で最初の本格的な児童文化論をお書きになっただけで、いらっしやいますね。「児童文化の理念と体制」という題で……。

波多野 ああ、「児童文化論」、よく見つけましたね。

本田 ええ、神田の古書店で。それから、これは



児童研究と保育〈4〉

〈聞き手〉

本田和子



「文章心理学」です。いずれも、私としては、かなり丁寧に読ませて頂いた懐しいご本なのですが、こうして並べてみますと、先生のお仕事は、多岐にわたっておいでですね。例えば、ここにあるだけでも三つの分野にまたがっています。

「文章心理学」関係のお仕事。そして、ピアジェ研究に代表される「児童心理学、発達心理学」関係のこと。それから、児童文学や放送教育などの「児童文化」の分野での活躍。しかも、それら多岐にわたる分野のお仕事で、いずれも、先駆者としての役割を果たしておいでになります。

そこで、今日は、先ず最初に、波多野完治という一人の研究者の精神と肉体の中で、どのようにしてそれらが芽生え、それぞれがどんな位置をしめ、そして、どう統合されていたのかと、そのあたりのことからお伺いしたいと思っております。

波多野 そうですね。ところで、これは、何枚くらいの記事？ 細々と話してもいいんですか？

本田 ええ、三〇枚前後にまとめますので、かなり、詳しくお話し頂けるかと……。

波多野 それでは、と……。岩波で出した「子どもの発達と教育」の別巻に短い自伝を書かされましたね、私は、それに「継子心理学」と題をつけたんですよ。最近

は、離婚も多くなってるし、継子も増加しているだろう、そういう人の為にもなるかもしれないと思ってるね。もち論、編集者はびっくりしてました。(笑)

私の両親は、私が生まれて間もなく別居したんです。親父がお妻さんを持つとか、色々あったらしいんですが、何しろ、旧憲法下の明治末期ですから、女性には殆んど権利のない時代です。とりあえず、私は母に連れられて家を出、明治四五年に小学校に入るまでは、母に育てられました。だから、幼児期のイメージは幸せなんです。然し、小学校に入るとき、父の許に引き取られて、母と別れ、五年生までは母親なしで育つ。そして、五年の時に、新しい母を迎えるわけです。これが、私にとって、大変

な出来事だったようですね。とたんに、成績ががたんと下った。先生がびっくりして、家庭訪問してくださるほどの下りようだったんです。その頃は、家庭訪問なんて殆んどしないものだったんです。

その頃から、私の心の中に、「自分の考えていることが相手に上手く伝わらないのは何故か、他人に伝わる時には、ゆがんだり変ったりしてしまうのはどうしてか」というような問題が大きく位置を占めています。何しろ、誤解なく上手く伝わった時は、世の中が明かるくなっていくようなよい気持ちなんですからね。

本田 新しいお母様との出会いで、お互いが気持ちを通わせ合うことの意味が、意識的に把握直された、ということでしょうか。

波多野 ええ、それまでは、母のない子ですし、大勢の店員にチャホヤされてわがままに育ってましたから、相手のことな

んで余り考えなかったんですよ。母が来てからは、「コミュニケーション」というのが、一番切実な問題になったんです。結局、私は、心理学という分野において、ずっと、「コミュニケーション」のことを考え続けてきたわけですね。

本田 私が先ほど申しました三つの分野も、いずれも「コミュニケーション」ということで通底しているのですね。なるほど……。

波多野 そうですね。児童文学の傑作なんてのは、コミュニケーションの極めて上手い例ですからね。何しろ、日常生活では、コミュニケーションが余り上手いかないもんだから、これをどういうふうに上手くいかしたらいいかという問題意識が、レトリックの研究へ向かわせたようですね。しかも、それを「心理学」でやろうというのを、小学校六年の時から、言っていたそうです。私は、憶えていないけ

ど、永井龍男が言っていました。

本田 小説家の？ 錦華小学校のご同期でいらっしやいますか？

◆心理学の中での模索

波多野 ええ、子どもの頃からの仲良し

です。だから、永井とか、或いは、大学に入ってからの良い友人らとは、非常に親しくコミュニケーションしているわけですがね。

ただ、中学、高校の時代は、家庭では、自分には理解して貰えないと思いついていました。

でも、一寸つけ加えておきますが、私の継母は、決して継子いじめをするような悪い人だったわけではありませんよ。極く普通の婦人で、普通の親でした。私も、そういう息子でもないんですが、ただ、継子特有の遠慮やひねくれは少しはあったし、そんな状態で、コミュニケーションの阻害現象が家庭の中に持ちこまれたことの影響は大きかったのでしょうね。それが、持続した問題意識を生み出したのでしょう。

波多野 ところで、私が大学に入ったのは、一九二四年ですが、当時の心理学では「言語心理学」は、殆んど問題になっていなかった。まあ、ブントの「民族心理学（一九〇〇）」なんかで、言語という現象を少しは扱っていましたが、それが、人間同士を結びついたり阻害したりする、そういう機能みたいなものへの着目は全然ないんです。人間同士の微妙な交流は、感情という形で扱えようとしたんですね、当時は……。

そこで、「感情」をテーマにしようかと思つたが、先生方や先輩は、難かしいと反対される。仕方なく、卒論は別のテーマでやつて、自分のやりたいことは、自分でポツポツやろうというわけ。

本田 先生はいつも、ある分野を非常に早くお聞きになりますね。例えば、ピアジェにしても、日本で最初の紹介者でいらっしやいます。昭和二年の「心理学研究」に書いていらっしやいますから……。しかも約四〇年後には、日本にもピアジェ・ブームが訪れたりしています。また、坪田譲治の童話なども、非常に早くから評価なされて、論評の対象にいらっしやるわけです。

その当時としては、人々に注目されていけないもの、アカデミズムの中心にないものに目をおつけになり、しかも、やがて、それが学問や文化思潮の中心にくる。そんな先生のご態度、学界での位置の取り方と申しますか、それが大変面白いと思つて、ね。ドイツ心理学万能の時代に、フランス系のものに目をおつけになったり、言語や感情に注目なさつたり……。私などには、これは、もしかしたら、一種の江戸っ子気質かしらと思えます。神田のお生まれで、

神田のお育ちでいらっしやいますから……

(笑)。

波多野 江戸っ子ねえ、私は、継っ子気質だと思つていますがね。(笑)

それでね、卒論のテーマを探し始めたから、フランスのビネー、例の知能検査のビネーね、あの人が暗示の研究をしているんです。これは面白いというわけで、卒論のテーマに取り上げました。まあ、ビネーの追試ですがね。暗示というのも、一種のコミュニケーションでしょう。そういう意味では、私の気分にはかなうものだったんですね。でも、出来は余りよくなかったようです。

本田 まあ。(笑)

波多野 七名卒業したんですが、一番優れていたのは、牛島義友さんのだと思ひますよ。もし外国語で発表されていれば、現在も、古典的な論文として評価されていただらうと思ひますね。

一九〇〇年頃から「思考心理学」の研究が始まりましたね、一九二五年頃までにか

なりの蓄積が出来ていたんです。それらをまとめて、思考心理学のある側面を明らかにしたのが牛島君なんです。これは、高水準のものだったと思つていきます。

それから、山下俊郎さんの「色彩の研究」、進出色と後退色の実験ですがね。これも、面白い研究でした。私の、そのくらいかな。まあ、七名のうち、真中くらい……。

本田 そうでございますか。真中ねえ。(笑)

ところで、城戸幡太郎先生も、同時代に帝大においでですね。

波多野 城戸さんは、ヨーロッパから帰られたばかりで、私が大学二年の時に講師になられました。一年の時から、週一回は、非常勤で来ておられたから、講義はずつと聴くことが出来たわけです。あの人は、心理学史、つまり、心理学の研究法の歴史を専門としておられてね、フランス系のことにも少し興味を持っておられました。

三年の演習では、色々とディスカッションが出来て、大変、得るところが大きかったです。だから、恩師というものを一人選ぶとしたら、絶対に城戸先生でしょうね、ええ。

◆ピアジェとの出会い

本田 そうしますと、城戸先生が目を開いてくださったフランス系心理学の中から、ピアジェが浮かび上ってきた、ということでしょうか？

波多野 いや、そうじゃないんですよ。その頃の大学生というのは、先生に教えて貰うんじゃなくて自分でやるわけですからね。ピアジェは、私が自分で見つけたんで

す。一九二七年に、神田の本屋で、現在は、「児童の世界観」って邦訳されてるあれがね、ちょうど目に入ったんです。それで、こりゃ面白そうだって、買ってきて読んだ。夏休みでしたから、私は、神奈川県

の二宮で過ごしてたんですが、早速、城戸先生に手紙を差し上げたわけです。「大変面白い本を見つけました」ってね。

すると、城戸さんは、返事をくれましてね、世界観とか芸術とか、そういうことを研究するのが、本当の心理学だってね。いま流行っている知覚の研究などは、ほんの一部、しかもはじっこに過ぎないってね。そこで、ピアジェの他の研究も調べて注文して、次々と読んだわけです。一九二四年に出た「子どもの論理」とかね。だから、城戸さんには激励されたけれど、見つけたのは私自身なんです。

本田 まあ、それでは、本当の出会いでございますね。

波多野 そうです。ピアジェに出会ったことで、私は心理学を続けることができたわけですね。

当時、フランスの心理学は、デュルケムという社会学者の影響下にあつたんです。

デュルケムは、知能や概念、或いは分類なども、すべて社会的に成立してくると主張していて、心理学を社会的に説明していたんですね。そこで、フランス心理学は、感情などもそのようにとらえていまして、笑うとか泣くという行為も、一種の言語ではないか、というような方向へ興味を向けていました。だから、ゲシュタルト的な考え方は余り採用してなかつたんですね。つまり、伝統的な連想心理学には反対だけれども、連想法則の否定という方向にはいかないで、社会的なものの重視という方向を採つたのですね。

然し、当時、日本はゲシュタルト全盛ですから、心理学者の仲間では、話が全然通

じないんです。興味を持ってくれたのは城戸さんぐらいですね。だから、実にいやんなっちゃってね。ところで、面白いことに、社会学者と話をすると通じるんですよ。

まあ、そんなこんなで、私は、フランスの心理学をやっても心理学者としては暮せそうもない、それなら、スイスの心理学をやってみようかと考えたんです。スイスは、ドイツの考え方に割と近いし、クレブレードなどは世界的にも認められているから、問題にしてもおかしくない。それに、何よりも、スイスはプロテスタントだから、フランスのカトリックより理解しやすい。小さな国だから心理学者の数も多くない。フランス心理学なんて大きな国で、しかも千年もの伝統のあるところは、とても一人ではやれませんか。そんなことを大学時代に考えて、クレブレードの本なんか読んだわけです。そんなこともあつて、

ピアジェと結びついたのですね。ピアジェは、クレペレードの所にいたわけですから……。

然し、ピアジェも、初めの三冊ぐらいは面白かった。ところが、四冊目は難渋しました。あの「児童の物理学」です。前半はいいが、後半は、何ともかとも難かしい……。難かしいことを言う人だと、しみじみ思いましたよ。(笑)

本田 先生は、ピアジェを忠実に縮尺したのではなく、ご自分流にアレンジした、内容を忠実に移植するというより、研究の特色を移植したつもりである、とおっしゃっておいでですね。

波多野 そうなんです。私は、日本にフランス系の心理学をそのまま持ってきても駄目だと思っていましたし、ピアジェについても、それを日本の社会に役立つような形で提供したいなと思ったわけです。そして、その点では、一応の役割を果たした

と思っています。というのは、ピアジェのやった仕事というのは、子どもに直接ぶつかってそこから理論を取り出し、それを大人へまで延長させていく、ということでしょう。当時の児童心理学というのは、大人の心理学の概念、分類や分析を、子どもにも当てはめていくというやり方でしたからね。ピアジェのは、それが逆で、子どもから大人へといく。そこが、大変新鮮だったわけです。

ピアジェは、一九三〇年頃までは、フランス心理学の影響下にありましたから、デュルケムなんかにもかなり影響されているんでね、それらも適当に考慮はしました。が、何よりも、子どもの立場を主にして、そこから大人へと展開させていく、その特色を大切に考えたわけです。まあ、私がやった児童心理学というのは、大人の心理学のカテゴリーで子どもを考えるのではないという発想の逆転と言いますか、そういう

ことだったんです。そして、フランスやイスの子どものことじゃなく、日本の子どもについて、そういう考え方で研究を進めようということ、最も、私自身は、具体的な研究はそう沢山はしませんでした……。

ピアジェをそういう形で使えたのは、先生がいなかったからかも知れませんね。一から一〇までピアジェに忠実に紹介しなくともよかったですし、また、当時の児童心理学の考え方を至上としなくともよかったですからね。

ピアジェの死後の評価としては、彼は、発生的認識論の研究者であるとされていますね。確かに、晩年などは、非常に形式的に整理された方向へ進んでいますね。然し、日本で、児童心理学者としてピアジェを利用したり評価したりする場合には、必ずしも、そこだけに限られる必要はない。私がやったような活かし方も、あってよかったのだと思っています。

◆時代の嵐の中で

—その1 保育問題研究会のこと—

波多野 それに、何しろ、難かしい時代

でした。私が卒業する年は、共産党の大躍進の年です。「三・一五事件」「四・一六事件」などで、共産党や教員組合も殆んど壊滅するんですね。だから、そんな時代に、子どもを守る戦いを進めるには、私がやった方法、つまり、子どもの立場からの発想を科学として推進する、というようなやり方しか無かったんじゃないでしょうか。

本田 そのお考えが、「保育問題研究会」のご活動に結びついていくわけですか？

確か、城戸幡太郎先生がリーダーでいらしたかと思いますが……。

波多野 ええ、城戸さんが「教育科学研究会」のリーダー。それを幼児向けに縮小したのが「保育問題研究会」ですがね、これは、菅忠道君の働きが大きいのです。こ

の人は、東大の教育学科を進歩思想のゆえに追われた人で、退学後、岩波書店に間接嘱託で雇われましたね、「教育」という雑誌の事務をやることになったんです。そこ

には、城戸さんがおられて、留岡清男さんがいて、その下に菅君が来た。それで、「教育科学研究会」を作って組織活動を始めたわけです。それと同じようなことを幼児でやろうと、菅君が考えて、私が引張り出された。それに、三木安正、山下俊郎、依田新、色んな人が応援しました。だから、「保問研」とは、新しい保育思想の啓蒙団体でもあり、運動でもある、というのがなんです。

そこでね、これからは非話しておきたいことなんですがね……。

本田 何のお話でございましょう？

波多野 「保問研」は「日本幼稚園協会」とは無関係に成立した。従って、対立している面もあった。ところでね、そこが倉橋

惣三という人の大きさであり、面白さなんです。あの方は、恐らく、何もかも理解した上で、知らん顔しておられたのだらうと思うんですよ。

倉橋先生は当時、文部省の社会教育官か何かを兼任しておられた。その頃の文部省は、内務省の出店みたくで、一種の思想警察みたいなところがありましたね、そのお先棒を倉橋さんはかつがされていたわけです。それに、女高師の教授で、幼児教育の最高権威である。その倉橋さんとは無関係に、「保問研」がスタートしたとなれば、これは、当然、対立関係になるわけです。そんなこんなを、倉橋さんは全部呑みこんだ上で、黙って見ていたんですね。

私はね、倉橋さんという人は、大いこのことは理解出来る人だったと思う。その点、森鷗外に似ていますね。森鷗外も、大逆事件後の後始末に山縣有朋なんかと組んで、文化行政みたいなことをやり、社会主

義思想を抑圧するでしょう。でも、彼自身は、せつせと社会主義の文献を読んで、よく解っているんですよ。倉橋さんも、そうだったと思います。

それに、日本では、対立するものを二つながら理解出来るという、不思議な思考があるんですね。教育界でも、マルクスとデュイイが対立しない。例えば、教育学者の勝田守一や宮原誠一は、マルクス主義に極めて近い立場を取りながら、デュイイ学者でもあったわけです。普通は、マルクス主義者はデュイイを批判するのに、日本では、デュイイから流れこんだマルクス主義者があり、両方を同時によく理解しているんですね。これは、どう解釈したらいいのかな。大変……。

本田 大変難かしい、そして大変面白い問題でございますね。日本的というか……。

波多野 そう。大変難かしいね。倉橋さんは、デュイイ的な考えの人です

がね。ともかく、倉橋さんは、自分の置かれた位置、つまり、社会教育官であり、女高師の教授であり、日本の幼稚園全体をあずかっているという立場上、「保問研」を公認するわけにはいかない。そこで、黙って眺めているんです。理解しながらね。何しろ、戦争が終るとすぐに、私を女高師に採用された、こんなことは、そう考えないと理解出来ないでしょう？

本田 なるほど。それは、新しい倉橋像でございますね。

波多野 そうなんですよ。倉橋さんご自身は、保守反動だと言われようともそれもいい、と思っておられたと思いますかね。でも、倉橋さんの複雑さは、若い幼児教育者の先生方にもせひわかってほしいもんですね。(笑)

本田 「保問研」と「日本幼稚園協会」、この二つは、思想的にも対立し、保育主張も微妙に食いちがいますのに、余り論争も

起こっておりませんでしょ。不思議と言えば不思議なんですが、倉橋先生のそんなお態度も一つの原因だったのでしょうか？

波多野 それが大きな原因だと思えますよ。もち論、もう一つの原因は、日本の幼児教育の置かれた位置でしょうね。日本では、幼児教育というのは抑圧されたものの解放運動だったんですね。義務教育でもないし、発生の当初からキリスト教の影響も大きいしね、そういう意味では、日本の教育体制から切り離された特殊地域ですよ。だから、そう、戦後、展開された「子どもを守る運動」の萌芽形態だったとも言えるでしょう。戦前から、非常にリベラルな考え方をしていたのは、幼児教育でしたからね。戦時中も、結局は「国民幼稚園」になりませんでしたしね。

◆時代の嵐の中で

— その2 児童文化運動のこと —

本田 先生は、「保問研」でのご活躍と並行して、児童文化運動でも重要な役割をお果たしになりますね。そもそも「児童文化」という用語と概念は、先生がお創りになったとも言われておりますが……。

先生は、昭和八年頃から、童話に関するご論考なども発表しておいでですし、児童文学とか児童文化へのご関心は、どんな経路でしょうか？

波多野 そう、先ず、坪田譲治さんという作家を発見したんですね。堀秀彦さんが編集していた「児童」という雑誌に、昭和九年頃から関係するようになりましてね、そこで、坪田さんの児童心理の文学とでも言えそうな作品を時々掲載して、大変よい作品だと賞めていたんです。その頃「お化けの世界」が「改造」に発表され、坪田さんは一躍有名になるわけです。以来、坪田さんは、子どもを主題にした文学の作家として文壇に位置を占めるんですね。まあ、

これは、児童文化運動と言えるかどうかかわからないが、児童文学関係の仕事の最初でしょう。

「児童文化」なんて言葉を使い出したのは、昭和一一年頃からですね。最初は、マスコミ時代の子どもに与えられる文化、とても言った意味で使い始めたんですよ。

「児童文化運動」というのは、思想的に見れば、一種の「子どもを守る運動」だったんですね。初めは商業主義的なマスコミ文化から子どもを守る、いわゆる俗悪図書とか、放送、映画、紙芝居などですね、それらに対する運動だった。然し、戦時色が強まると、子どもを戦争から守り、戦士として育てる方向から守る、という方向に展開するわけです。そこで、権力に対する抵抗運動的な色彩が出てこざるを得ないんですね。

「児童文化」という言葉が盛んに使われたのは昭和二三、四年頃ですが、その後は、

様々な圧力がかかります。「児童」というのはインターナショナルだから、日本の子どものためには「少国民文化」を構想すべきであるとかね……。貴女が古書店で見つけた「児童文化論」が、第一版だけで絶版になったのも、そんな動向の反映でしょうね。以後、「少国民文化協会」に引き継がれていく形になり、私も一応はそこに参加させられますが、昭和一八年には退陣しました。これが、戦前の「児童文化運動」とのザツとした関連です。

ところで、戦後のアメリカの使節団の一人が、「児童文化」という言葉に大変感心してくれましたね、アメリカには、そういう言葉も概念もないというわけです。児童図書とか子どものための映画という、個々のものはあるがそれらを総称する言葉はない。日本ではよくそういう概念を設けてね。アメリカだけじゃなく、こんな言葉のある国は余りないでしょう。ソ連くらい

かな。だから、ある点ではアメリカより進んでいた。然し、逆から言えば、日本の児童文学や児童映画が、お互いに非常に入り組んで発達してしまつて、その害悪もアメリカなどとは比較にならない。そこで、全体を見渡し、統一的に把握する必要が出てこざるを得なかつたんですね。そういう日本文化の特殊事情も見落としてはならないでしょう。

本田 印刷物も放送メディアも、玩具も遊びも、みんな有機的にからみ合う。いわゆるマス・コミの立体化現象でございますね。それが、昭和の初めから既にあったということですね。

波多野 そうです。まさに、その立体化現象です。それに、特に外国には存在しない紙芝居がありましたからね。

本田 現在のテレビの機能を、紙芝居が果たしたわけですね。よくも悪くも……。

多波野 そうです。それに、紙芝居の方

が善悪ともより露骨に出せたんです。紙芝居のおじさんの仲介次第で、いい方にも悪い方にも持つていけるんですからね。

本田 それだけに、「児童文化運動」の機能する場も大きかつたと言ふことでしうね。

◆芸術と科学のはざま

本田 「保問研」や「児童文化運動」のお仕事は、激動の時代が、書齋の学者を街頭に引つ張り出した典型と見ることも出来

そうですが、「文章心理学」の場合は、先生にとって一番学問的など申しませんが、書齋的なお仕事になりましたか。これは、昭和八年の「国語文章論」あたりが最初のご論考ですか？

波多野 そうね、あれは、児童文学や児童文化とは、一応、無関係に始まりますからね。明治書院が「国語科学講座」を刊行することになり、城戸先生が頼まれたんで

すね。そして、私に「国語文章論」が廻ってきた。丁度その頃、日本で心理小説が勃興するんです。川端康成が「水晶幻想」を書いていた頃かな、彼なんかが、ジェームス・ジョイスばりの小説を書いたり、横光利一なんかもね。そこで、従来の日本語文体では処理しきれないような心理現象を表現しようと、新しい文体の試みが現われるんです。私には、大変、興味深い出来事でした。

そこで、心理小説の文体の発展と、そのための新しいレトリックの発展を結びつけて、「文章心理学」というジャンルを考えたんですね。言葉やコミュニケーションには以前から興味がありましたから……。だから、私のは、最初は、新しい文学運動と並行して始められたわけです。戦後、民主化と共に、文章表現が国民全体のものとなる。そこで、私も、社会心理学的なコミュニケーション理論をふまえて、コミュニケーション

ーションにおけるパースペクティブ、つまり「いかに説得するか」という方向でレトリックを考えるようになりましたがね。そもそもは、心理小説の文体の必然性を主張したかったんです。あんなのは小説じゃない、などと悪評されましたから。

すよね。ところが、私の頃は、そういう人が余りにも少なかった。だから、私は、芸術への興味を捨てたくなかったんですね。他の人より何かありましたらうと思って……（笑） おかげで、芸術と心理学のバランスをとって、今日までやってきました。まあ、その点では、非常に幸せだったと思っていますよ。

本田 そうしますと、先生は、文学、とりわけ小説がお好きで、それを大切にお考えになったということですね。

本田 文学や芸術への強いご愛着と、それを心理学的に解明なさりたいというご興味、それらが、坪田譲治や新美南吉など、未知の才能を発見していく基盤になっていると考えてよろしいでしょうか？

波多野 あ、それはそうですよ。

波多野 そうしますと、「文章心理学」と「児童文化運動」は、やはり深く結びついているのではございませんか？ 一見、無関係なように見えますけれど……。

一種の芸術運動でしたから。

本田 そうですね。たゞ、時代の動きの中で、「子どもを守る」という色彩が急速に濃くなっていったのは確かでしょうし、止むを得ないことですけれど……。

波多野 そう／＼。だから、私は、マルクス主義の人たちと共闘しましたが、どこかに一線を画していた。つまり、あの人は、芸術性をそれほど重視していませんね。私にとって、児童文学や絵本の芸術性は大変大切でしたからね。

だから、私は、「少国民文化研究所」を追放されて田舎に引っこんでいた時、一つの決心をしたんです。戦争が終わったら、質のいい教育雑誌か文化雑誌を出したい。それから、リベラリズムという線だけは一生守り抜こう、そのためには、どんな会にもどんな党派にも所属しまい、ってね。

ですから、どこにも属さず、純粋の個人として、協力すべきものには協力し、断る

べきものは断る、という形を通してきました。但し、学会は別です。これは、一種の職能団体みたいなもので、入らないわけにいかないから……。

本田 先生は、色々な分野に目配りをし、いゝ仕事をしようとしている人を見つけて出し、よく支えていらつしやいますね。

「泣いた赤おに(喜寿記念論集)」を拝見致しますと、そのあたりのことが手に取るようにわかります。つまり、どんな党派にも属さず、高い見識と批評眼を持った一人の個人として、偏見なくいゝ仕事を支えています。そんなお立場、インテリジェンスの高い自由人とても申しましようか、そんなありようでいらしたわけですね。

波多野 あゝ、それはどうも有難う。えゝ、そうなんですよね、えゝ。

本田 戦後は、児童文学の創作を遊ばしましたね(笑)。「ミッシッピー川の探険」とか……。あれは、一六年の「児童文化

論」の中で主張していらした健全な子どものヒロイズム、あれの具体化と見られますね。その後は、いかゞでしょうか？ 創作の方は……。

波多野 (笑) 私みたいだね、論文を書きつけている人間というのは、作品を書くときは、かなりの時間と筆ならしが必要なんです。論文ってのは概念的に考えるんですよ。概念をそのまゝ言葉にすればいゝ。でも、物語の場合は違うんですね。言葉が「ものになる」って言うのかなあ。とにかく、概念じゃ駄目なんです。

だから、お茶大に招かれたりして概念的な仕事の主になると、創作への言葉の転換が難かしくなるんですね。大学を退いてから、またやろうか、なんて思っていました。が、大病をしましてね、死にかけたですよ。体が衰弱していると、創作は出来ませんですね。それに、病気が直つてからは、一番したい仕事として「生涯教育論」が浮

かび上つてきた。だから、児童文学の創作するのは、またご縁がなくなつた……。

本田 では、これから……(笑) 児童文学というのは、人生の年輪がものを言うお仕事でもございますから、これから、言葉の精霊に呼びかけられて、と言うこともございませうでしょうか？

波多野 (笑) それは、才能のある人の話でしょう(笑)。まあ、しかし、私がある時期に、物語を書いたということは幸せだったし、憶えていてくれる人がいることも有難い(笑)。

本田 戦後は、「映画教室」「教育技術」「学習心理」などの雑誌を通して、教育現場との接触が密におなりでした。もち論戦前の「保問研」や「児童文化運動」も、現場との出会いですが、戦後はもっと明確に、学校教育の現場に働きかけようとしていらつしやいますか……。

波多野 そう、「保問研」の頃はね、私

は心理学者という枠を守って考えた。実践の問題を心理学的に考えるところなる、と言うようにね。然し、もつと子どもの生活の中に入りこんで、保育者や先生の立場で考えてみないといけないんじゃないか、と感じたのが戦後の動きですね。だから、垣根を取りはずして、先生方とつき合ひ、教育の技術や方法も考えたんですね。

たゞ、実際に実践をしてみる、ということとはしなかつた。例えば、林竹二氏や津守さんのようなやり方。あの人たちは、大変優れた実践が出来るのでしよう。私はね、あゝは出来ないという自信がある(笑)つまり、本当の先生より上手には子どもを扱えないんですよ。だから、そういうところまではやるべきじゃない、と思つている。

本田 先生はご自分に対して客観的でありつしやる。やはり、都会人でいらつしやいますね。それに、先生は、書籍を愛しておいでですね。絶えず新しい文献には目を

通し、書物との出会いを欠かさず……。恐らく、これからもずーっと、本を読む人として知的興味を活性化させ続けていらつしやるのでしようね。

波多野 えゝ、本は好きですね、新しいのも古いのも……。まあ、本屋の息子ですからね、本に対する感覚はよく発達しているのかもしれませんが。昔は、フランス語の本はアンカッパだったから、パッと見当をつけられないといけないんです。買つてきてからでは間に合わない……。

いや、然し、この頃は、いゝ本が増えましたね、子どもの本や絵本の世界でもね。講談社から頼まれて絵本賞の選考委員をしていますが、本当に水準が上がつた。楽しいですよ。

本田 確かに、子どもの本は、量・質ともに、以前とは比較になりません。それに先生の周囲には、きつといゝ本が集まつてきますのでしよう。それとも本が呼びかけ

てくるのでしょうか。ピアジェとは、神田の本屋でパッと出会つた、というお話でしたが、本当に本の好きな方には、本の方が呼びかけてくるのかも知れません。これからもお元気で、沢山の本の呼びかけに答えながら、芸術と科学のメディアエーターであつて頂きたいと思つております。

神田生まれの神田育ち。錦華小学校―開成中学―高一―東京帝国大学と生粋の東京人。フランス系心理学を核としながら、社会学、哲学、文芸学、そして芸術や教育の分野へと知的越境を重ね、一九七〇年以降の「開かれた知性」を先取りして歩かれた。波多野先生は、四〇年早く生まれ過ぎなすつたのでは……。

然し、アームチェア・サイコロジストを自認される先生の周囲は、様々なジャンルの書物たちのかもし出す知的活力で溢れている。「記号論」や「レトリック」、先生の時代が来ているのだ。これからも、益々お元気で……。

うっとりしそうな素敵なティー・カップに、都会人で芸術愛好家の先生のセンスがキラリと光つた。